

第十一回～第十五回（平成三十年度～令和四年度）

湖南市の小さな詩人たち

／子どもたちが創った

詩・俳句・川柳・短歌 入選作品集／

石ころ



主催 湖南市教育委員会

協賛 水口ライオンズクラブ

協力 甲西北中学校美術部

はじめに

日本にはむかしから道ばたの小さな花や虫、季節の風、家族との何気ない会話など、日常の小さな出来事に心をふるわせる美しい表現が数多くあります。例えば、春時雨、夕立、粉雪、吹雪など「雨」や「雪」という自然現象を一つとっても、わたしたちに感動や恵みを与えてくれる様々な表現があります。

わたしたちが、多くの人と出会い関わる中で、コミュニケーションをとるとき、言葉は人と人をつなぐ大切な役割を果たします。自分の思いや気持ちを周りの人伝えるとき、言葉が豊かであれば周りの人の心にこだまし、より温もりのある人間関係を築けます。

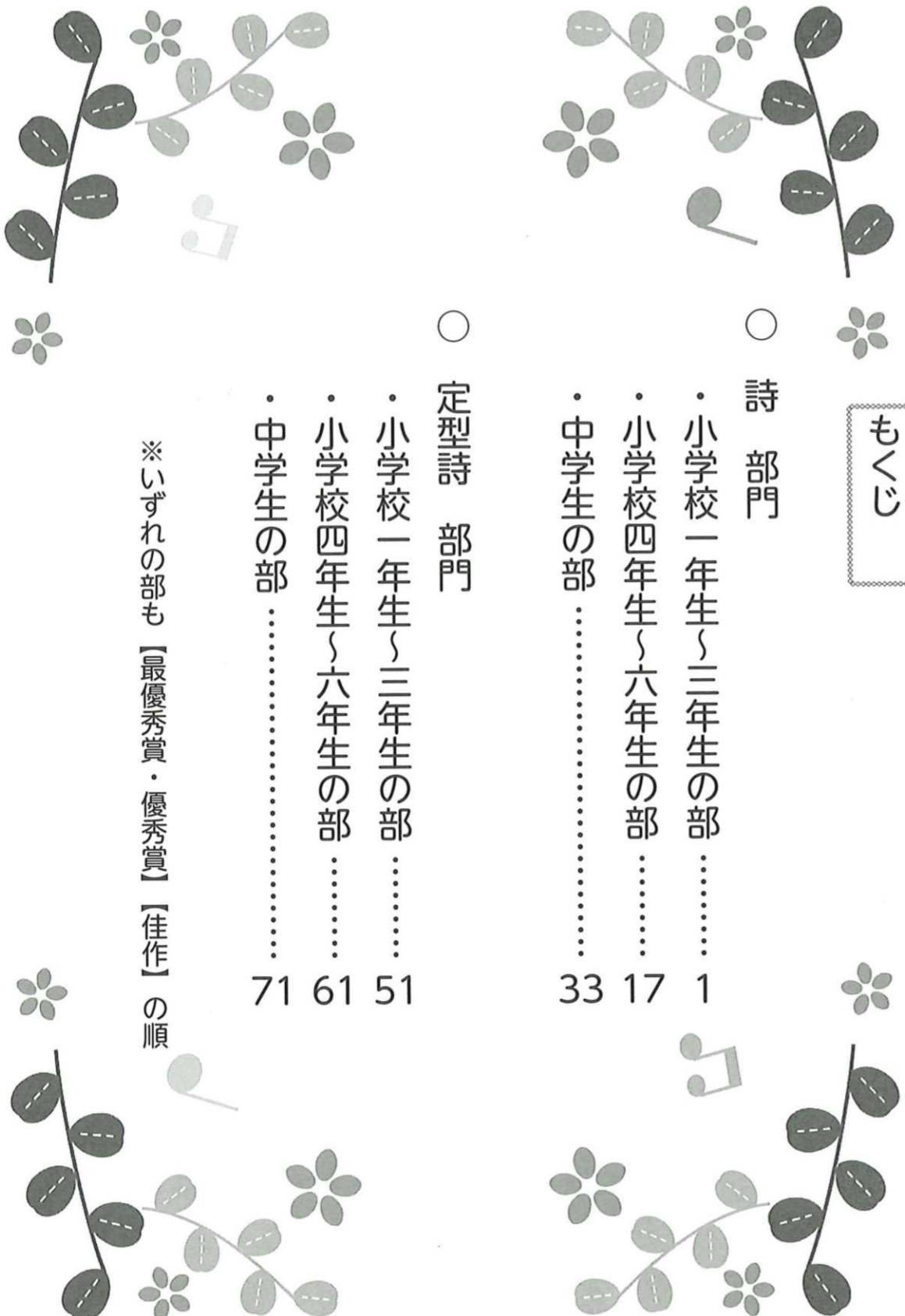
このような力を湖南市の子どもにつけたいと始めた「湖南市の小さな詩人たち」事業も、今年度で第十六回を数えることができました。ここに第十一回から第十五回の入選作品をまとめました。湖南市の子どもたちがここで出会った作品に心を動かし、ますます豊かな言葉の力を育んでくれることを願っています。



湖南市教育委員会教育長

松浦

加代子



もくじ

○ 詩 部門

- ・小学校一年生～三年生の部 1
- ・小学校四年生～六年生の部 17
- ・中学生の部 33

○ 定型詩 部門

- ・小学校一年生～三年生の部 51
- ・小学校四年生～六年生の部 61
- ・中学生の部 71

*いずれの部も【最優秀賞・優秀賞】【佳作】の順

○最終審査

詩部門

定型詩部門

平賀の野呂
胤壽選

※最優秀作品には選評をいただきました。

最優秀作品の【評】はお二人によるものです。

【詩 部門】

小学校一年生～二年生の部

○掲載作品の作者の学年は、入選当時のものです。





最優秀賞・優秀賞



佳作

第十一回（平成三十年度）

ランドセル

シャチの一日

いぬがしんだ

第十四回（令和三年度）

お母さんの心中

にじ

ひきだし

第十一回（平成三十年度）

てんとう虫

おにぎり

ぼくはおとうと

第十四回（令和三年度）

きせつの空

きれいなモミジ

ぼくはおとうと

第十一回（令和元年度）

ここから

できたぞ 前まわり

いなか

第十五回（令和四年度）

ほし

あまがえる

第十一回（令和元年度）

でんわしたら

きれいなモミジ

第十二回（令和元年度）

おかあさん

雪

第十五回（令和四年度）

あまがえる

きれいなモミジ

第十三回（令和二年度）

ぐれいのくればす

カラスのおしゃべり

第十三回（令和二年度）

わたしは もみじ

くつ

星空がにつこりわらつてる



第十一回（平成三十年度）最優秀賞

ランドセル

三雲小学校 二年 宮島 みやじま

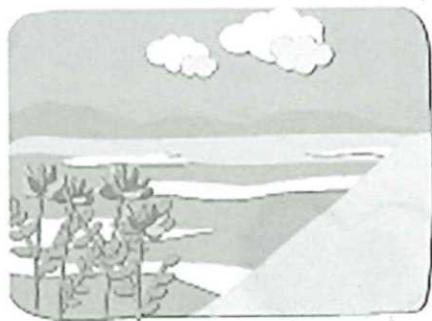
佳央 かお



学校につれていって。
せなかにせおつて。
たくさんいつしょにいて。
そつぎょうなんてしないで。
もつといっしょにいて。
やつとあさがきた。
きょうもせなかで
いっしょにいさせて。

【評】

毎朝、背中にせおうランドセルの気持ちになつて、
うたつています。学校への行き・帰りずっとランドセ
ルとは、いつしょ。だいの仲良しです。ランドセルは、
卒業などしないで、ずっと一緒にいて、と言つている
のですね。今日も朝がきて一緒。ランドセルの喜びが
いきいきと表現されています。





第十一回（平成三十年度）優秀賞

シャチの一日

三雲東小学校 二年

中川 なかがわ
茉莉亞 まりあ

菩提寺北小学校 三年

村山 むらやま
十愛 とあい

いぬがしんだ

シャチになつて

きれいな海をおよぎたいな。

いろいろな魚にあって

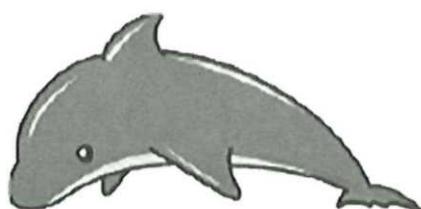
たのしくあそびたいな。

ワカメや貝がらを見つけて、

色や音であそびたいな。

ザブーンとどびこんで

気もちよくおよぎたいな。



夕方になつて
きれいな空ときれいな海をいつしょにして

パーティーだ。

よるになつて

ほしを見ながらねむりたいな。



たいせつだなあ
と思った
わたしはそのことを
なかなかきづかなかつた



第十一回（令和元年度）最優秀賞

「ここから

石部小学校 三年 村岡 陸むらおか りく



「ここから ここから ここからだ
だいじょうぶだよ ここからだ
いつもいいことだけじゃない
わるいこともときどきある
だけどいつもそばにいる
だって友だちだから

「ここから ここから ここからだ
いつもがんばろ ここからだ
いつもいいことだけじゃない
ころんてしまう時もある
だけどいつもそばにいる
だって同じ人げんだから
だってみんないつしょだから

【評】

毎日^{まいにち}の生活^{せいいかつ}のなかには、いいことも、わるいことも、失敗^{しつぱい}も成功^{せいこう}も、かならずあります。しかし、友達^{ともだち}どうし協力^{きょうりょく}していけば、「今日ここから」かならずよい方へ、幸せ^{ほうせい}の方へ生きが^か変わつていくといふのです。失敗^{しつぱい}をのりこえ、成功^{せいこう}へ。「ここから ここから ここからだ」のフレーズがとてもよくきいています。



第十一回（令和元年度）優秀賞

できだぞ 前まわり

いなか

菩提寺北小学校 二年 田中 美妃

下田小学校 三年

山田 鈴すず

きょうは、せいこうさせるぞ
そんな気もちでにぎつた
てつぼう
力をぎゅっと入れてにぎつた
てつぼう
きょうこそせいこうするぞ
前まわり

頭が下になつたとき
学校がさか立ちしていた
ゆつくり足をおろすと
じめんについた
あれえ まわれたあ
やつたあ、はじめてできた
前まわり

いなかつていうのはね、
都會よりもゆつたりしてて、
いごこちのいいところだよ。
都會よりも田んぼがあつて人がやさしくて。
空気がまろやかなところ。
いなかに住んでいたわか者は、
みんな都會に行つてしまふ。
いなかはこんなにいいところなのに。
人の手で育てた食べ物は、
とくべつにおいしい。
育ててくれている人が心をこめて、
一生けんめいに。
たくさんの人で。
わたしたちのために。
いなかはしあわせだ

せい、のう、でえ、ぴょーん
うまくとびつけたぞ
ゆつくり体を丸くする
こわくない こわくない
自分をはげました

先生に見てもらおう
友だちに見てもらおう
おとうとにも見せよう
そして教えてあげるんだ
わたしが先生になるよ
いなかはしあわせだ





第十三回（令和二年度）最優秀賞

わたしは もみじ

菩提寺小学校 一年 杉森 あん

すぎもり

【評】



紅葉の季節、もみじの葉が赤く色づき、はつとする
ほどの美しさです。そのようすを「真っ赤なドレス/
夕方の夕日の色にそつくり」と表現しています。本当
にその通りですね。さらにその葉の一枚一枚のかわい
い姿を「赤ちゃんの手とおなじ」と表現しています。
なんとすぐれた的確な表現でしょう。終句の「風がふ
くと／ダンスする」も秀逸です。さわやかなすんだ感
性がとらえた作品です。



第十二回（令和二年度）優秀賞

くつ

三雲小学校 二年 福島 そうま

三雲東小学校 三年 千葉 ちば

楓有 ふあり

星空がにつこりわらつてる

げたばこで
なかなか来ない
きみをまつ

ぼくはげたばこがきらいだ
ここで朝

おわかれするからだ
きみが帰つてくるまで

思い出してるんだ

星空がにつこりわらつてる

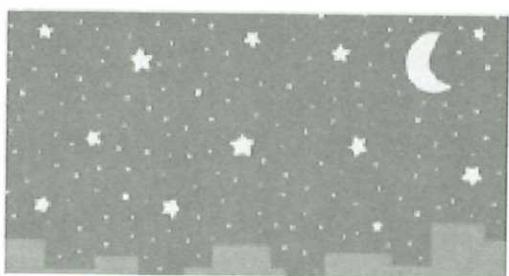
大きな星空は
おとなかなあ

めちゃくちゃ小さい星空は
赤ちゃんかなあ

大きな星空も小さい星空も
につこりわらつている

おなかが大きな星空は
赤ちゃんがいるのかなあ

星空みんなみんな
につこりわらつてる





第十四回（令和二年度）最優秀賞

お母さんの心の中

岩根小学校 三年 芦田

あしだ
ゆう

お母さんが元気な時は

心の中にっこり晴れができている

でもかなしい時は

たくさん雨がふっている

そしてやさしい時は

花畠の中に立っているようだ

お母さんの心の中は

すゞいなとそうぞうした



【評】

お母さんが元気な時は、心の中が晴れていて、お母さんが悲しんでおられる時は、心の中が雨、そして、やさしい時は、お花畠の中に立つておられるようだ。家庭の中でのお母さんとの生活を、晴れた空や雨、お花畠に比喩して表現されていて、すぐれた作品になっています。お母さんとの日常生活が目に見えるようですか。



第十四回（令和二年度）優秀賞

にじ

下田小学校 三年

吉川 よしかわ
葵 あおい

三雲東小学校 二年

森庵 もりな
紗彩 さや

ひきだし

雨がやんで外に出た

すると

大きな大きな七色の橋がかかっていた
にじだ

心がすぐしあわせになつた

にじの上を歩いてみたいな
にじのすべり台すべってみたいな
でもどんどんうすくなつた
「おねがいだから 消えないで」



プリンのトランポリン

チヨコレートのすべりだいでひとつとび
あめのエレベーターのトランポリン
はねてせんべいの家であそんだよ
つぎの日ひきだしをあけてみると

いつものひきだしだ
でもね

また雨がふつたらにじに会えるかな



第十五回（令和四年度）最優秀賞



ほし

三雲東小学校 二年 村上 葉瑠

【評】

夜空にきらきら輝く星。星になつて空から

地球の人々のようすを見ているのです。

夜には、みんなでキラキラお話をし

て、朝になると、みんないつしょに眠り

ます。

夜になると、人間はみんな眠るけれど、

夜おそくまで勉強している子どももいる

のです。

その子ども達を、いつも見守っている

星。「しつぱいしてもいいよ。つぎは成

功します」と、星は光のことばで、はげ

ましてくれているのです。村上はるさん

は、夜空の星になりきって、詩を書いて

います。すてきです。

だいじょうぶ

しつぱいしたつて

わたしたちが見まもつてているよ

わたしたちはちゃんと

べんきょうやいろいろがんばつてているところ
見ているよ

ほし





第十五回（令和四年度）優秀賞

雪

三雲東小学校 二年 宮本 綾希みやもと あやき



わたしは雪

雪だるまになつたり
雪合せんの玉になつたりする

いつも雲の上にいる

はやくふりたい、ふりたい

雲の上にいれば

きせつが来る

「やうなう」を言つたら

空からふつていこう

けしきが見える

ああはやくあそんでほしい

おかあさん

石部小学校 一年 松川 衣琉まつかわ えり

おかあさん

わたしがおかあさんになつたら
わたしのおかあさんみたいになりたい
おかあさんはおそうじがじょうず
おかあさんはりょうりがじょうず
だからかぞくがえがおですごせている



わたしはおかあさんになつたら
おかあさんははをぴかぴかにするのがじょうず
だからかんじやさんがえがおですごせている
けしきが見える

わたしはおかあさんになつたら
わたしのおかあさんみたいになるんだ

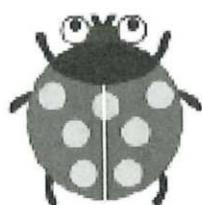


第十一回（平成三十年度）佳作

てんとう虫

石部小学校 二年 青木 凜桜あおき りりお

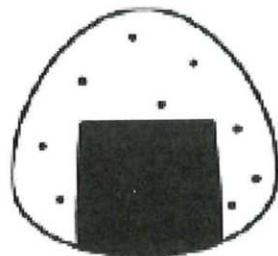
春になると てんとう虫に会う
こんなにちはつて言つてみた
こんなにちはつて言つてくれるかな
てんとう虫とお話できるかな
いつか一緒にお出かけしたいな
公園にも行きたいな
わたしが小さくなつて
きみの上に乗つてお出かけしたいな
てんとう虫とオシャレしたいな
いっぱいあそびたいな
いつかお話しようね



おにぎり

岩根小学校 二年 園田 真唯そのだ まい

まつしろおにぎり
なかのぐ なあに
たべてみたら
しおだつた
おいしかつたな
つぎのぐ なあに





第十一回（令和元年度）佳作

でんわしたら

石部南小学校 一年 藤井 七美

うさぎに でんわしたら
いま とぶれんしゅうしてるっていうかしら

ドラゴンに でんわしたら

いま ひをだすれんしゅうしてるっていうかしら

とらに でんわしたら

いま はしるれんしゅうしてるっていうかしら

おおかみに でんわしたら

いま ほえるれんしゅうしてるっていうかしら

プルルルル・・・・・

あ、もしもし、

いま ジをかくれんしゅうしているの



あまがえる

三雲小学校 三年 江崎 香歩菜えさき かほな

ピヨンピヨンはねる あまがえる
ジャンプしながら げーじげーじげー

だんだんなかま あつまつて
げーじげこないで うたつてる

おにじりにも はじめたよ

げーじげーじげーじげー かぞえだす

かくれんぼも はじめたよ
げーじげーじげーじげー もういいかい
げーじげーじげーじげー もういいよ
さつそくかえる さがしだす

みどり色が はつきりみえる
げーじげーじげーじげー み一つけた

なんだかとつても たのしそう

げーじげーじげーじげー ぴょんぴょん





第十三回（令和二年度）佳作

ぐれいのくればす

三雲東小学校 一年 井上 璃子

は「このうちにすんでいる。

いろいろのかぞくとすんでいる。

えをかくのがおじ」と。

いろをつけたらさんぱつみたいにみじかくなる。

ぼくはあんまりつかわれない。

あかくろぴんぐがうらやましい。

ぼくもはやくさんぱつしてほしい。

ねずみやぞうをかいてほしい。

ず「こうでつかわるのでまつてほしい。

ふぐがやぶれるほどつかってほしい。



カラスのおしゃべり

菩提寺北小学校 三年 田中 美妃

げんかんを出たとき

カラスが鳴いた

「カアカアカア」

しばらく聞いていると

ほかのカラスの声が聞こえた

「ひきのカラスが鳴いている

「カアカアカア」「カーカーカー」「カアカアカア」「カーカーカー」

あれ、おしゃべりをしているみたい

「カアカアカア」「カーカーカー」

やつぱりおしゃべりしてるんだ

「カアカアカア」「カーカーカー」

「あかこまつてるの？」

「あのね、もっと友だちほしいんだ」

「それは、自分から話しかけるといいよ」
つて相談している友だちカラスかな
それとも

「お母さん、おなががすいたよ」

「もうすぐ」はんだよ」

つて言つてる親子のカラスかな

カラスもおしゃべりするんだね
わたしにはカラスの言葉はわからない

自分たちの言葉があるんだね

人間の言葉 カラスの言葉

犬の言葉 ねこの言葉

みんなに言葉つてあるんだね

カラスのおしゃべり続いてる

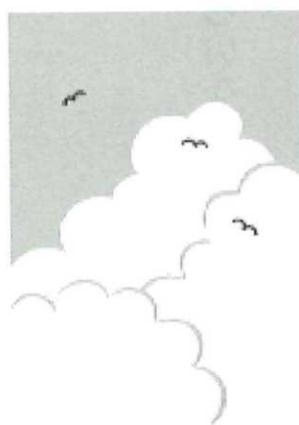
「カアカアカア」「カーカーカー」



第十四回（令和二年度）佳作

きせつのは

三雲小学校 三年 石田 はなり



きせつがかわる
空の色もかわる
どうしてかわる
ふしぎだな

春の空

ピンクを感じる空

夏の空

水のようにきれいな空

秋の空

青とオレンジ色の空

冬の空

白にかこまれた小さな青空
ふしぎだな

ぼくはおどりと

三雲小学校 一年 可成 愛理

おねえちゃん
おもちゃさわっただけで
すぐおこるから
おねえちゃん
だいきらい
でもほんとは
すき
おねえちゃんに
あやまるほうがいいかな
それとも
あやまらないほうがいいかな
まよつちやう
なんか
イライラしてきた
やつぱり・・・
あやまりにいこう





第十五回（令和四年度）佳作

きれいなモミジ

水戸小学校 二年 小西 彩葉

わたしはモミジ

おきがえ大きだよ

夏はみどりのふく

秋のはじめには、きいろのふく

秋には赤いろのふく

どのふくもおしゃれ

風にゆれてゆーらゆら

わたしはモミジ

いろんなしゅるいがあるよ

イロハモミジやオオモミジ

ほかにもいろんなしゅるいがあるよ

カエデさんとてるよ

どのモミジもおしゃれ

風にゆられてゆーらゆら



【詩 部門】

小学校四年生～六年生の部

○掲載作品の作者の学年は、入選当時のものです。





最優秀賞・優秀賞



佳作

第十一回（平成三十年度）

冬

ずっとといっしょのランドセル

笑顔のかたち

幸せは

かおり

第十一回（令和元年度）

えんぴつ

秋の一日

素敵なクラス

第十五回（令和四年度）

自然の声

梅雨の空

秋ひらり

第十二回（令和元年度）
手
お母さん

第十三回（令和二年度）
空の旅

第十四回（平成三十年度）

太陽

第十四回（令和二年度）

太陽

明日はえがお

ずつといっしょのラン

ンドセル

幸せは

かおり

第十一回（令和元年度）
手
お母さん

第十三回（令和二年度）
空の旅

第十二回（令和元年度）
自然の声
梅雨の空
秋ひらり

第十三回（令和二年度）
感謝

リレー

私は石

第十二回（令和二年度）
私たち二人の友情

生きる

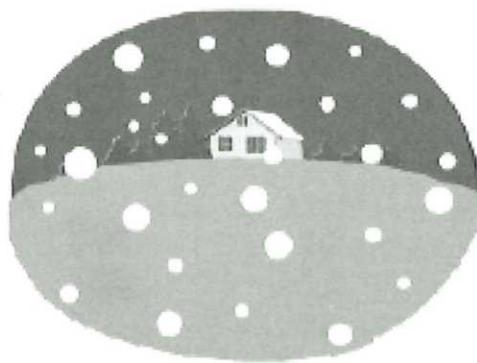
わたしの天使



第十一回（平成三十年度）最優秀賞

冬

菩提寺北小学校 六年 梅原 うめはら
瑛美華えみか



【評】

寒い寒い冬、山の動物も植物も、しーんと静かです。川も凍てついています。その様子を、「川がねむる時、植物がねむる時、動物がねむる時」ととらえた感性がすぐれています。そして、冬は雪や霜や氷が生まれる時で、それを「ものの生まれる季節」と表現したところが、とてもユニークで新鮮です。

冬は、山がねむる時
川がねむる時
植物がねむる時
動物がねむる時
冬は、雪がうまれる時
しもがうまれる時
氷がうまれる時
小さな楽しげがうまれる時
冬は、ねむりと
物のうまれる季節



第十一回（平成三十年度）優秀賞

ずっといっしょのランドセル

幸せは

6年間の思い出つまつたランドセル

6年間毎日背おつたランドセル

私が成長するたびに

ランドセルは古くなる

私が成長するたびに

ランドセルは小さくなる

気づけば私は6年生

ランドセルはキズだらけ

そのキズには、私の6年間が

つまっている

いつも私のそばにいた

ずっといっしょのランドセル



菩提寺北小学校 六年 松嶋 純樂
まつしま きよら

菩提寺小学校 六年 奥村 樹花
おくむら じゅか

幸せは 家に帰つておかえりと言つてもうられること
幸せは しようもないことで笑い合えること
幸せは 友達と遊べること
幸せは 大好きな人に会えること
幸せは いつも通り平和な一日をすごせること
小さなことだけど
それを幸せと思うと
毎日が楽しくなる
幸せは 今、この一瞬を生きていること





第十一回（令和元年度）最優秀賞

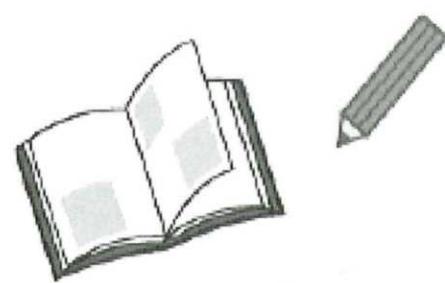
えんぴつ

三雲東小学校 五年 井原 海翔

かい
と

【評】

鉛筆は、けずられて、けずられて、だんだん短くなつていきます。しかしそれは生徒たちの勉強に役立つて短くなるのです。努力して、「のびたり」「長くなつたり」するのではなく、短くなり、最後にはなくなつてしまふ。でも、そのあとは、美しい文字になり、生徒たちの学力になるのですね。



書いて書いてけずられて
どんどん短くなつていく
時間がたつているのに
のびずにどんどん短くなつていく
長くならずに短くなる
ちいさくなつて
短くなつて
最後にぼくは、いなくなる
正しい字
美しい字を紙に残して
最後にぼくは、いなくなる



第十一回（令和元年度）優秀賞

秋の一日

菩提寺小学校 四年

楠岡

拓也

石部南小学校 六年

ヴァンハイ

素敵なクラス

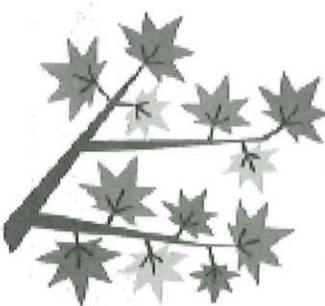
外で元気な声が聞こえる

ぼくは一人でしづかに
本を読んでいる

ふと顔を上げて山を見た
もみじがきれいにさいてている

また本の続きを読もう

ああきょうは
とても気持ちのいい一日だ



私もそう
クラスみんなの
やさしさにかこまれながら
自分らしく生きる。





第十三回（令和二年度）最優秀賞

私たち二人の友情

菩提寺北小学校 六年

田中 たなか 杏莉 あんり



【評】

友情とは、いつたいどんな関係でしよう。お互いの心の深いところで、しっかりと結び合い、共感しあつて、いる関係といつていいでしようか。だから時にけんかをしたり、意見がちがつたり、にらみあつたりしても、二人の関係は少しもくずれない、むしろ友情が深まっていくのですね。人と人との友情について深く考えたい作品です。ラストの「どんな年月がたつても／だれもこわすことのできない／私たち二人の友情」のフレーズは、友情のすばらしさ、だいだんな年月がたつても、だれもこわすことのできない、私たち二人の友情です。

彼らはそんな日をくり返しくり返し時をたっぷりとかけて、私たちだけの友情をみがいた私たちの時をたっぷりかけてつくつたどんな年月がたつても、だれもこわすことのできない私たち二人の友情

けんかしたり
すれちがつたり
にらみあつたり
おたがいの気持ちをぶつけたり
うまくいかない日もあつたり
しゃべつたり
笑いあつたり
分かちあつたり
おたがいを好きになつたり

私たち二人の友情

私たち二人の友情

私たち二人の友情

友情



第十三回（令和二年度）優秀賞

生きる

石部小学校 六年 北村 結愛きたむら ゆあい



生きる
生きる喜び
自分と向き合う
今つながる
大切にしたいこと
つながる
今、動く
生きていることに感謝し
一生を大切にする

わたしの天使

三雲小学校 六年 西岡 佳穂にしおか かほ

わたしの心の天使
それは私に心をひらき
気分が晴れるもの
わたしの元気の天使
それは私の心を
はげましてくれるもの
わたしの笑顔の天使
それは私の心と顔が
真の私になれるもの
私の天使は
花咲く明日へと
つなげてくれるもの





第十四回（令和二年度）最優秀賞

楽譜のマンション

岩根小学校 五年 青山 あおやま

璃音 りおん

私は音符
一つのお部屋に
四人の兄弟で住んでいる

四分音符の四兄弟
右どなりのお部屋

全音符さんが一人で住んでいる

左どなりのお部屋
二分音符の兄弟が住んでいる

向かいのお部屋は

八分音符の八兄弟が住んでいる

いろんなお部屋に
いろんな音符さんが住んでいる

そう

ここは楽譜のマンション



【評】

家庭での毎日の生活を、楽譜の音符にたとえて描いた作品で、ユニークな発想に目を見はりました。一章の音符の中に四分音符の四兄弟が住んでいて、そのとなりには、全音符、その向かいには二分音符が住んでいる。そして、みんなで楽しい音楽を演奏しているのです。ひとつ一つの部屋には、少しづつちがつた兄弟（音符）が音楽をかなでている。一曲の音楽はまさに、楽譜のマンションですね。一家族ではなく、マンション全体を一つの音楽の家族としてとらえているところもすてきです。



第十四回（令和二年度）優秀賞

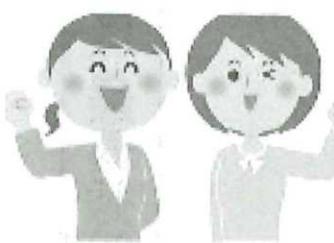
笑顔のかたち

岩根小学校 五年 **國松** くにまつ
美海 みうな

かおり

三雲東小学校 四年 **平野** ひらの
燈 あかり

毎日 私の周りには笑顔がある
やさしい笑顔 うれしい笑顔
笑顔にもいろいろな笑顔がある
今日も明日も必ずだれかの笑顔がある
でも それとは逆に悲しい顔もある
その時は 私の笑顔でその子の心を
照らしてあげたい



かおる
あざやかでふわりとした
海のかおり
かおる
きらりと空にうかぶ
星のかおり
かおる
そつとやさしくとおる
風のかおり
かおる
そつと包んでくれる
花のかおり
みんなのかおりもきっと
やさしくおだやかなはず
やさしいかおりに包まれて
今日もがんばろう





第十五回（令和四年度）最優秀賞

自然の声

石部南小学校 五年 奥村 おくむら 花湖 かこ



【評】

奥村さんは、水の声、木の声、風の声、岩の声と、心を澄ませて心で聞いています。木の中を流れる樹液の音は、耳では聞こえません。木が風と会話をしている声も、風が世界中をめぐって、その景色と会話をしている声も、大きな岩が時が流れるのをとめて、そのままわりの景色とかわしている声も、心で聞いているのです。その発想の清新さ、風景に対する深い洞察力に心打たれて読みました。詩は感動の表現ですが、この詩からは作者のたしかな感動がつたわってきます。

木の声
木に耳をすませてみ
水のとおる声が聞こえるよ
木の声
大地を根でつかみ
風といっしょに会話する
木の声
世界のはてまで旅をする
いろんな景色を見てきたろう
風の声
岩の声
ときとまる
だがずつと景色を見ている
岩の声
ときとまる
ありがとう
自然いつもありがとう



第十五回（令和四年度）優秀賞

梅雨の空

石部南小学校 五年

岡本 つかさ
おかもと つかさ

秋 ひらり

三雲東小学校 五年

奥村 真伊
おくむら まい

止みそうにない弱い雨

どんよりしている雨の空に
やわらかい光がさしこんで

夢の橋ができてゆく

あの弱い雨をかき消して

晴ればれとした青空が
どんよりとした雨の空に
ふりまくように広がってゆく

雨の後の青空には
にじがかかっていたよ



秋 ひらり

秋 ひらり 落ちる
満足したように舞う



秋 ひらり 舞い落ちる

秋 ひらり 落ちる
夏の陽気 にげるよう

秋 ひらり 落ちる
冬のおとずれ 感じさせる



第十一回（平成三十年度）佳作

明日はえがお

石部小学校 四年 林 はやし 南海 みなみ

今日はないでばかりだつたわたし

明日は、

きつとえがおになる。

今日はともだちとけんかしたわたし

明日は、

きつとなかおりできる。

今日はわからぬことがあつたわたし

明日は、

先生にきく。

なにがあつても

明日は、

えがおになる。





第十一回（令和元年度）佳作

お母さん

三雲小学校 四年 龍下 晃平

手

三雲小学校 五年 小谷 胡桃

「はやくしなさい」
「何してるの」
温度さがはげしいぼくのお母さん
おこっているときは
まさにふん火中の火山
元気がないときは
南きよくの氷
本当のお母さんは
みんなをやさしくつつみこむ
春のようなあたたかさだ



手 絵を描く時 勉強をする時
筆をおどらせる えんぴつを走らせる
手 仲間につなぐ 弟の手をひき
バトンを持つ 家族とつなぐ
手 仲間と喜びを分かち合い
ハイタッチする
手 自分の好きなことができる
感謝の気持ちをもって
合わせる





第十三回（令和二年度）佳作

感謝

石部南小学校 六年 涌井 ゆくい
柚貴乃 ゆきの

リレー

三雲東小学校 六年 北川 きたがわ
楓梨 かりん

「ありがとう」
だれに伝えようか。
身近な人だとはずかしい。
今も昔もその先も
「ありがとう」
それだけなのに言えない自分に
少し失望してしまう。
ああそうか。
最初に感謝すべきなのは
「自分」なのではないのかな。
がんばったのも
つらかったのも
全部「自分」じゃないか。
「ありがとう」
これからもずっとよろしくな。
ありがとう自分。

笛の音がなりひびき
いっせいにスタートした
みんなの応えんが聞こえ
一番の人が走つてくる
走つて走つてわたしのところに
バトンがわたされる
バトンがわたされたしゅんかん
心がつながり
きんちょうがとけてわたしは走り出す
みんなが走り終わった時 みんなは
一つのバトンでつながっている



私は石

石部小学校 六年

谷 俊輔たに しゅんすけ

私は石

恐竜の時代よりずっと前
とってもすごく古い時代
私はうまれた

おかしな生き物

強い生き物

たくさん見てきた

もちろんティラノサウルスだって

ふみつけられても

けられても

それでもずっとがんばってきた

そして今
ぼくは人がいっぱい来る
有名な神社のすみつこの
たくさんの中の仲間が
集まる所にいる





第十四回（令和三年度）佳作

太陽

菩提寺小学校 五年 景山 美紗都

かげやま
みさと

あたたかいな あたたかいな
これはあなたの手かな

あたたかいな あたたかいな
あたたかいな あたたかいな

これはあなたの勇気かな

あたたかいな あたたかいな
あたたかいな あたたかいな

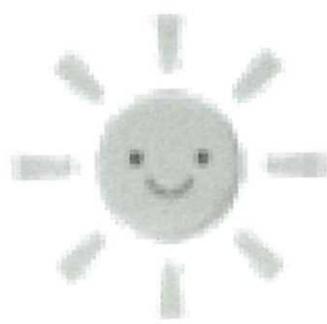
これはあなたぬくもりかな

あたたかいな あたたかいな
あたたかいな あたたかいな

これはあなた心かな

あたたかいのはあなたの光
あなたの光はみんなの光

だから今届けよう





第十五回（令和四年度）佳作

空の旅

菩提寺小学校 六年 久保井 くぼい 蒼翔 あおと

おれたちは、雲

世界中を旅している。

たまには子ども雲たちに

「ゴロゴロ」とおこるときもあるけど
家族が一番

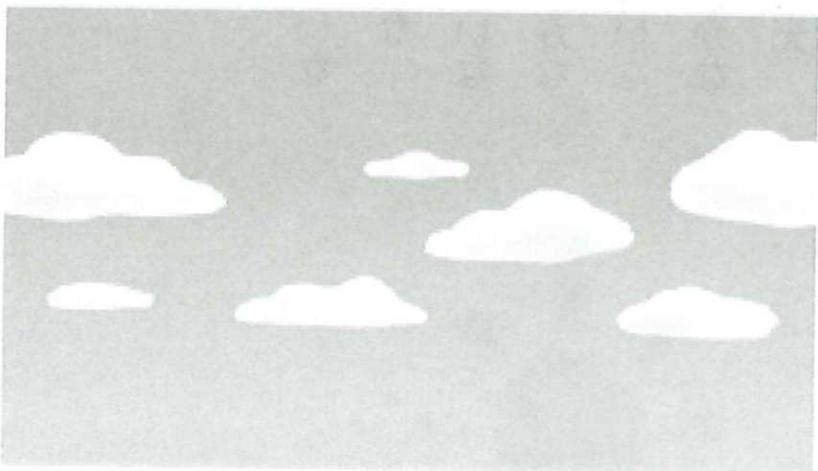
おれたちは、雲

世界中を旅している。

たまには子ども雲たちがケンカして

「ポツポツ」となくときもあるけど、
みんな仲よし

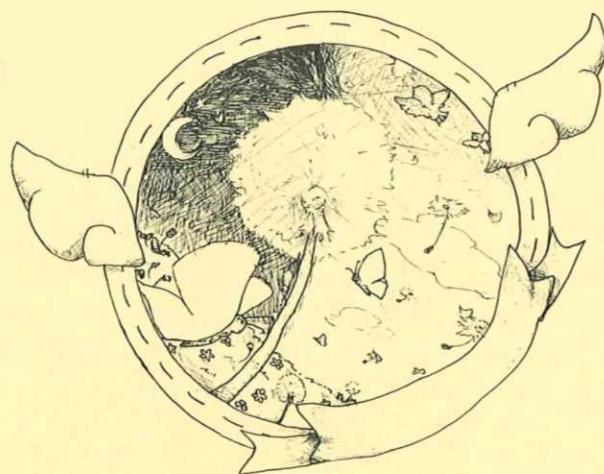
おれたち雲は、今もどこかで、世界中旅している。



【詩
部門】

中学生の部

○掲載作品の作者の学年は、入選当時のものです。





最優秀賞・優秀賞



佳作

第十一回（平成三十年度）

街・坂・波

音と空気

毎日

第十四回（令和二年年度）

石ころ

走り出す

人生の色

第十一回（平成三十年度）

当たり前なこと

空と私

家族

第十四回（令和二年年度）

教室の色

土のはたらき

栗

第十一回（平成三十年度）

第十一回（令和元年度）

私の心

わたしの鳥は不思議。

わたし

第十四回（令和二年年度）

第十一回（令和元年度）

器楽演奏

変わる心

人生の階段

第十五回（令和四年度）

第十五回（令和四年度）

栗

道

スター・トライン

第十二回（令和二年年度）

第十二回（令和元年度）

人生の音色

羽ばたく

種

第十三回（令和二年年度）

第十三回（令和二年年度）

人生の音色

羽ばたく

種



第十一回（平成三十年度）最優秀賞

街・坂・波

石部中学校 一年 大継 おおつぐ 真由 まゆ

それは、果てしなく深い海
それは、限りなく広い空
それは、とてつもなく遠い星
それは、気づかないほど小さな花

全てが私となり
私の未来となり
ちりになり
埃と化す

それほどのことが、
たったそれだけの日常が
世界を創るのだと思うと
とても不満で
なんだか幸せに感じる

【評】

私たちの日常生活の中でおこるさまざまの出来事、移り変わる季節、そしてその上に広がる広い空、遠くの海や山、それらがすべて、「私となり、私の未来となり」また「ちりとなり、「世界を創り出している」とうたつています。ものごとを深く広く観察するすぐれた感性によつて、はじめて生まれた作品です。秀逸です。

隣の家の夫婦げんか
妹の手をひく男の子
それを見守る車
路地裏を通る猫
誰かを待つ君
変わらぬ信号
変わる季節
変わらぬ風景



第十一回(平成三十年度)優秀賞

音と空気

甲西北中学校 一年 村田 優莉

毎日

甲西北中学校 一年 澤井 花音

ひびきわたる。
物があたつて
空気が
震える。

ひびきわたる。
物があたつて
空気が
震える。

音は
空気に
美しく
ひびく。

音は
空気に
美しく
ひびく。

空気は
震えを
どこまでも届ける。

空気は
震えを
どこまでも届ける。

そして
優しく
消えていく。



私は自転車をこぐ
風を切つて
切つて 切つて
ひたすらに進む
金木犀の匂い
雨の前の匂い
クリームシチューの匂い
毎日同じようでいて
それでいて毎日少しずつ変わってる
昨日と同じくり返しの中で
今日という新しい一日を
生きていく



第十一回（令和元年度）最優秀賞

わたし

日枝中学校 一年 恵美 ゆりあ

わたしに てをのばしても だれもとどきはしない
わたしを みると なぜかみんなげんきになる

わたしは みんなとつながっている

わたしと つながると みんなのこころはみずいろにそまる

わたしは いつか みんなとあそんでみたい

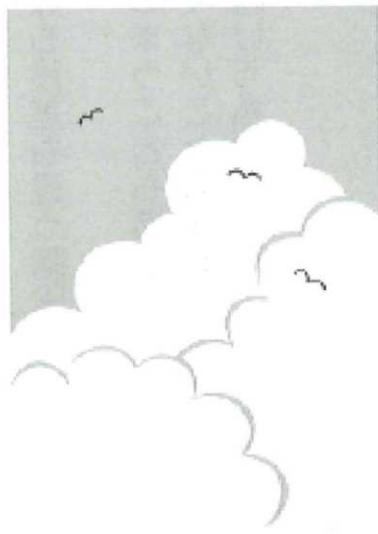
でも わたしは みんなをみられない

だつてわたしは

わたしは

空だから

【評】



青くすきとおつた空。広い広い空の立場に立つて、空をうたつてているのです。手をどんなにのばしても空の上までは、とどかないけれど、空を見ている者の心を明るくし、元気づけている。けれど空は、自分の姿は見ることができないのですね。

それは私達人間も同じですが深い哲理をふくんだ

作品です。



第十一回（令和元年度）優秀賞

みんな

甲西北中学校 二年 澤井 さわい 花音 かのん



人生の階段

石部中学校 三年 福本 ふくもと

美空 みく

人は毎日階段を登っている。
一段。また一段と。

人それぞれ段数も段差も違う階段。

時には落ちてしまうこともある。
時には登りたくないこともある。
それでも登り続ける私がいる。

人生は階段だ。
果てのない階段だ。
一段。また一段と。
登り続けることそのものが意味だ。
だから私は登り続ける。
一段。また一段と。



みんな
みんな違うから おもしろい
みんな違うから 助け合って支え合う
みんな
この世界をつくっている



第十三回（令和二年度）最優秀賞

人生の音色

石部中学校 一年 杉江 すぎえ 夢羽 ゆめは



【評】

人生の喜怒哀楽をピアノの音色にたとえた作品でユニークです。「悲しいときは低い音色／嬉しいときは高い音色／感情が重なると美しい和音ができる」本当にその通りです。深い感動や喜びに出合った時、ピアノの音は、おのずと和音になつてているのですね。人間の感情は複雑で纖細です。それが感動の働きによつて、美しい和音になつたり激しい単音になつたりします。ラストの「人生はいろいろな音色があるけれど／幸せな音色は必ずやつてくる」も秀逸です。人生は常に前向きに、明るい方へ明るい方へ希望をもつて生きておれば、必ず幸せはやつてきます。

人生はピアノだ
悲しいときは低い音色
嬉しいときは高い音色
感情が重なると美しい和音ができる
人生はピアノだ
寂しいときは短調のメロディー
楽しいときは長調のメロディー
どんな気持ちも思うがままに表現できる
人生はピアノだ
嬉しいとき 悲しいとき 楽しいとき 寂しいとき
人生はいろいろな音色があるけれど
幸せな音色は必ずやつてくる



第十三回（令和二年度）優秀賞

羽ばたく

甲西中学校 三年 橋本 はしもと 幸羽乃 さわの

種

甲西中学校 三年 井上 いのうえ 楓果 ふうか

辛すぎて泣いた日

母は何も言わずにそばにいて一言だけ放つた
「逃げても後悔しない？」

その言葉に救われた

冷たくなつていた私の心に
温かい火を灯してくれた

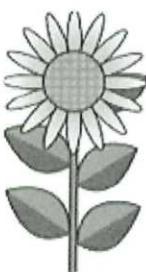
「ありがとう 逃げずに戦うよ」

あの日の温かさが今の私の心の支え



一粒の種から

一本のひまわりが生まれる
小さな奇跡は
大きな幸せになつてゆく
はかなく小さな命は
まっすぐと空へと向かつてのびていく
そして新たな命が生まれる
一本のひまわりから
何百もの光が生まれる
そうして未来へつながつていく





第十四回（令和二年度）最優秀賞

石ころ

日枝中学校 一年 虎渡り

友花



【評】

公園にころがっている一個の石ころ、ちいさな石ころ。こんな石ころも人類が生まれるはるかな過去の、何億年もの歴史を秘めているのですね。地球の生成の時代から恐竜の時代、氷河時代、そして現代。川辺に放り出されたり、川の水にけずられたりして、今、目の前にころがっている。ちいさな石ころから、地球の生成の時代まで想像をふくらませて書かれていて、秀逸です。

公園に転がっている
石ころを見る
こんなちつぽけな石ころでも
何か物語があつて
私たちが生まれる
何億年も前に
この石ころは生まれて
恐竜に蹴飛ばされて
川に落ちて けずられて
川辺に放り出されて
それでも負けずに前を向いて
何千年とたつたある日
男の子に拾われて 投げられて
やってきたこの公園
この石ころは 弱くて 強くて
みなさん こいつに 拍手という名の
勲章を



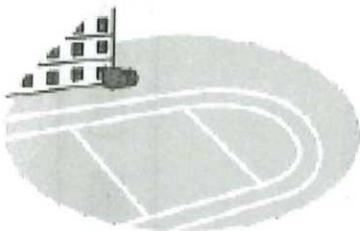
第十四回（令和二年度）優秀賞

走り出す

甲西北中学校 一年 中村 伊吹

人生の色

甲西北中学校 一年 田中 杏莉



いつきにとび出し

地面を思いっきりける

ゴールが見えると

もう自分は

風になつている

自由で爽快な

走り終えると

いつもの自分に戻る

夢から覚めたかのように

人生の色ってなんだろう
人生の色ってなんだろう
人生の色ってなんだろう
人生の色ってなんだろう
人生の色ってなんだろう
人生の色ってなんだろう



無限大の 虹色だ
それは



第十五回（令和四年度）最優秀賞

私の心

甲西北中学校 一年 園田 そのだ
莉央 りお

私の心

それはパレット

私の心

それはキャンバス

重ねて
重ねて

絶対消えない

重ねて
まだ完成しない

楽しい出来事があつたら
楽しい色をいっぱいぬつて
悲しい出来事があつたら
悲しい色をいっぱいぬつて

いろんな色を

毎日まぜて

毎日ぬつて



【評】

心とはなんと大きく広いキャンバスで
しょう。日常生活での楽しい出来事、悲し
い、苦しい出来事もすべてつつみこんで、
けつしてあふれ出ることはありません。こ
の詩ではその出来事をパレットの絵具に仮
託して表現しています。いろんな色をませ
て、重ねて、重ねて、深い人生智に結実し
ていくのです。完成はまだまだ先のことで
しょう。美や真実を求める心、人を愛する
心も、このキャンバスには、ぬられている
ことでしょう。すぐれた作品です。



第十五回（令和四年度）優秀賞

わたしの鳥は不思議。

甲西北中学校 一年 黒木 優夏

わたしの鳥は不思議。
わたしの手からはなれない。
水色なのに顔だけ白い。
きっと
白いペンキを頭から
かぶったんだろう。
わたしの鳥は優しい。
わたしが嫌なことがあると
パタパタと飛んできて
大丈夫？
大丈夫？と
首をかしげる



自分のどこかで

石部中学校 二年 村田 百優

自分の上には空がある
自分の下には大地がある
自分の横には友がいる
当たり前なことだけど
全て欠けてはいけないものたち
自分の中には夢がある
自分の手には縁がある
自分の傍には絆がある
もしも全て欠けてしまつたなら
当たり前も消えてしまう
わたしの鳥は優しい。
わたしが嫌なことがあると
パタパタと飛んてきて
大丈夫？
大丈夫？と
首をかしげる



自分の何処かで
ずっと探しているものたち



第十一回（平成三十年度）佳作

当たり前なこと

石部中学校 一年 **込山 力輝**
こみやま りき



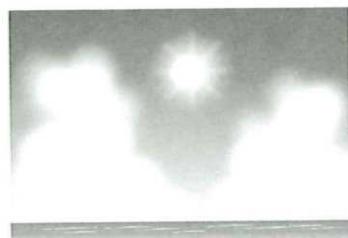
当たり前な日常
当たり前の行動
当たり前の会話
私の人生は「当たり前」で
できている。
でも当たり前が
幸せだと気づく時
当たり前は
当たり前ではなくなるのである。

空と私

石部中学校 三年 **内田 ゆかり**
うちだ ゆかり

私が悲しくて泣いている時
空は泣いている
なんか気分が落ちこむ

私が一人さみしい時
空はすごくいい顔をしている
だから もう大丈夫



私をてらす太陽はとても
あたたかくてまるで
私は「一人じゃない」とほげまさされている

ああ そうだ
どんな時も空は私をほげましてくれるんだ

そして私は今日も空に笑いかける

家族

甲西中学校 三年 山内 萌

私は家族に多くのことを教わった。

人を大切にする気持ち

人が傷つく言葉

人とのつながり

愛されること

私の今は家族に支えられてできている。

これから先、なにがあつても

家族という存在はずっと変わらない。

大人になり、新しい家族ができるとき

私が教わったように

大切なことを子どもにも感じてもらいたい。

大切な気持ちを伝えられる人に

私はなりたい。



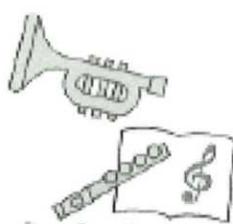


第十一回（令和元年度）佳作

器楽演奏

石部中学校 一年 山本 埼の
やまもと の

大きく息を吸つて
楽器に息を送りこむ
すると

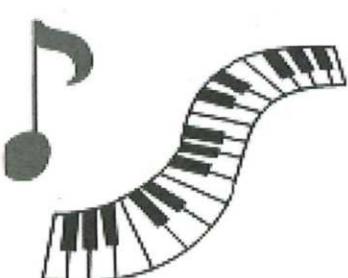


何もなかつたところに
友達の音が
先輩の音が
わたしの音が
重なつて
響いていく
私はこの瞬間が
大好きだ



音楽
みんなの身近にある
いろんな歌声がある
いろんな歌詞がある
楽しい 好き 悲しい
たくさん思いが伝わる
わけでてくる感情の数々
考えてみよう

自分と歌をくらべて
きっと



甲西中学校 一年 余語 みず花
よご みづか

変わる心

音楽

たくさんの思いが伝わる
わけでてくる感情の数々
考えてみよう

わたしの自分が見つかる
自信が持てる
そして 成長できる
音楽はすごい

道

石部中学校 三年 森地 董もりち すみれ

一步一歩確かめて
一步一歩踏みしめる

どこへ行けば 正解か

どの道選べば 成功か

知ってるならば

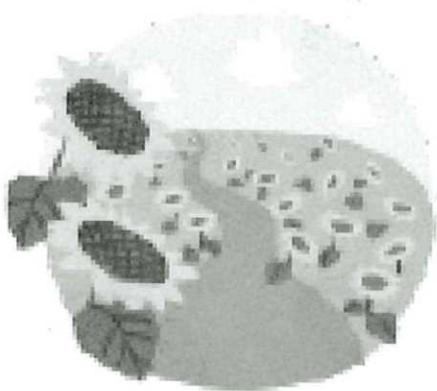
「迷い」はない

どこへ行つても壁ばかり
どの道選ぶも自分次第
きっと「道」に
「正解」こうたえ はない

だから私は

一步一歩確かめて
一步一歩踏みしめる

のびゆく雑草
みだれる川
道にあく穴
何本もの分かれ道
焦り・不安・迷いへと
姿を変えて現れる



スタートライン

石部中学校 三年 山本 竜也

この進むべき道の先に
待ち受けるものは何だろう

報われないこと

実を結ばないこと

そんなこともあるかもしけないけれど
信じていたい僕が残してきた軌跡を

この線に立つまでに
作り上げてきたものは
決して僕を裏切ったりしない
そう信じて位置につく
この進むべき道の先に
僕を待ち受けるものは
夢の実現だと信じて

「これ以上前に進めない」

そんな時に思い出す

一緒に戦ってきた友の顔

さあ一步を踏み出そう

「後悔だけはしたくない」

その思いを胸にして

そしてスタートラインに立つ





第十三回（令和二年度）佳作

夏の終わり

石部中学校 三年 隅田 万琴

体育館にたちこめる空氣

緑葉がこすれあう音

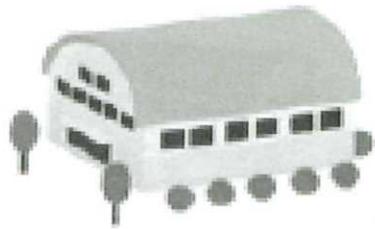
照りつけるオレンジ色の西日

仲間の汗と努力の匂い

気にも留めなかつたものが

あんなにも輝いていたなんて

今さら気づいても遅いというのに





第十四回（令和三年度）佳作

教室の色

甲西中学校 一年 中島 江梨花なかしま エリカ



教室の前には
緑が一面に広がる黒板
教室のうしろには
みんなの木のロッカー
教室の横には窓があり
緑色の山といろんな色の家で
広がっている

教室には

一つ一つに色があり
一つ一つに個性がでていて
教室はいつも
いろんな色で
にぎやかだ

土のはたらき

日枝中学校 一年 中澤 聖翔なかざわ せいと

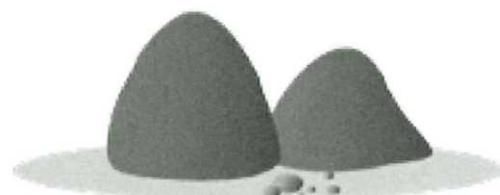
土つてすごいね
どんだけ雨がすごくて
水を吸収してくれるんだよ

土つてすごいね
植物や野菜を
育てることができるんだよ

土つてすごいね

その育った植物でいっぱい
呼吸することができるんだよ

土のおかげで私達は生きることが
できているのかもしねない





第十五回（令和四年度）佳作

栗

石部中学校 二年 村島 佑奈むらしま ゆうな

僕はトゲトゲの中で眠っている。
あつたかくて安全ですやすや眠れる。

だけど

僕はいつか外の世界へ飛び出す。
白いお米の中に紛れたり、
ケーキになつたりする。

僕はカメレオンだ。何にでも変身できる。

みんな僕をおいしそうに食べてくれる。
食べられちゃうのはちょっと怖いけど
みんなに幸せを届けられているのなら
僕はそれでいい。

僕は僕なりに満足。

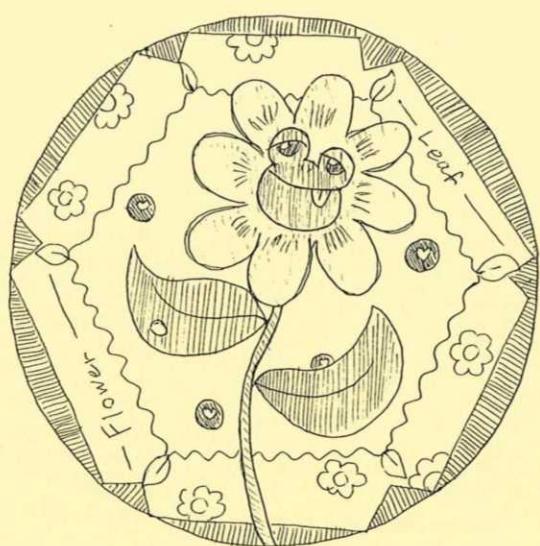
僕は
幸せ



【定型詩 部門】

小学校一年生～二年生の部

○掲載作品の作者の学年は、入選当時のものです。





最優秀賞・優秀賞

第十一回（平成三十年度）

最優秀賞

優秀賞

第十四回（令和三年度）

最優秀賞

優秀賞

第十一回（令和元年度）

最優秀賞

優秀賞

第十五回（令和四年度）

最優秀賞

優秀賞

第十二回（令和二年度）

最優秀賞

優秀賞

第十五回（令和四年度）

最優秀賞

優秀賞

第十三回（令和二年度）

最優秀賞

優秀賞



佳作

第十一回（平成三十年度）

第十一回（令和元年度）

第十二回（令和二年度）

第十四回（令和三年度）

第十五回（令和四年度）

第十一回（平成三十年度）最優秀賞



下田小学校 二年 高田 悠貴

夏の陽が 海でおかおを あらつたよ



【評】

第十一回（平成三十年度）優秀賞



三雲小学校 二年 立入 寛太

ふでばこは 夜中の間 まつてます



菩提寺北小学校 二年 西根 里桜奈

おひさまが アイスペろぺろ たべちゃつた



ギラギラと照りつける真夏の陽射し。
海水浴へ行つたときの感じでしようか。
海面とあればキラキラと反射をして、む
しろその輝きが美しくも感じられます。
お陽さまの方が、そんな海を覗きこむよ
うにお顔を洗つたというたとえが、メル
ヘンチックでとてもユニークです。絵本
からのヒントもあつたのでしょうか。と
てもリアルな印象を受けます。

第十一回（令和元年度）最優秀賞



菩提寺小学校 三年 吉村 恒輝
よしむら こうき

おつき見は 一こころもつきも うえをむく



【評】

さぞかし見事な満月のお月見だつたことと想像します。今にも手に届きそうで、その明るく神祕的で偉大なさまに、心も奪われそうです。ただただ無心に上を向き天を仰いでいると、お月さまも一緒にさらなる天空を仰ぎ見ているようです。なによりもお月さままでが、上を向いているという視座にとても感心をしました。

第十一回（令和元年度）優秀賞



下田小学校 一年 小林 奏音
こばやし かなん

はやくこい かきさんおちない おちてきて



三雲東小学校 二年 森田 至音
もりた しおん

音がく会 シャンリンタンラン ぼくのでばん

第十二回（令和二年度）最優秀賞



三雲東小学校 一年 中谷 なかたに 真月 うづき

えんぴつが かみのひろばで あそんでる



【評】

えんぴつを持って、さあ白い紙に何をなぞつているのでしょうか。あるいは大きな画用紙に数々の色鉛筆が転がっているようすかもしれません。作者である真月さんと鉛筆が一体になつていてからこそ「紙の広場」という豊かな感性が生まれるのでしょう。

第十三回（令和二年度）優秀賞



三雲東小学校 一年 三崎 みさき

らんどせる おんぶだいすき わがままさん



菩提寺北小学校 一年 岡田 おかだ 悠絹 ゆうけん

あきの空 おつたひこうき すいこんだ



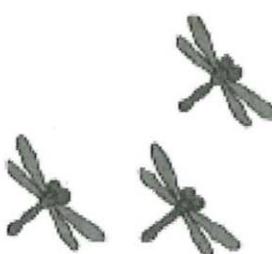
第十四回（令和二年度）最優秀賞



【評】

下田小学校 二年 大垣 おおがき 彩華 いろは

ひと休み わたしのゆび先 赤とんぼ



第十四回（令和二年度）優秀賞

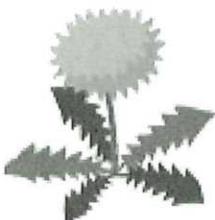


菩提寺北小学校 三年 恩谷 おんたに 要 かなめ

もみじの葉 ぼくとじやんけん チヨキで勝つ



わたしのゆび先にとまつた赤と
んぼ、それはせわしく飛びかうゆえ
のひと休み。絵本にあるような空想
であってもいい、その「わたし」も
ひと休みをしているのでしょう。



見つけたら ふーてしちゃう たんぽぽだ

水戸小学校 二年 野中 のなか 優史 ゆうし

ふーてしちゃう

第十五回（令和四年度）最優秀賞



菩提寺小学校 二年 飯田 紗也佳

とう校中 友だちの手に ダンゴ虫



第十五回（令和四年度）優秀賞



岩根小学校 三年 加藤 未来

赤いくつ わたしをどこかへ つれてつて



石部南小学校 一年 野白 芽愛

あさがおが ひらいですぐり わらつたよ



【評】

いつもいっしょに登校する仲良し、その友達が朝のあいさつをするやいなや見てくれたのは手のひらのダンゴ虫。そこでどのような会話があつたのでしょうか、想像するととても楽しくなってきます。ちょっとしたその時の驚きが伝わってきます。



第十一回(平成三十年度)佳作

「おろぎが はっぱにかくれ ぼくを見る

下田小学校 二年

木の実たち 友だちつれて 落ちて行く

三雲東小学校 三年

おちばがね うずにまかれて サササササ

菩提寺小学校 三年

すすきでね いろんなかたち ほうきかな

菩提寺小学校 三年

きらきらと さんまは海の ぎんメダル

菩提寺小学校 三年

黒木

原田

谷本

山口

前田

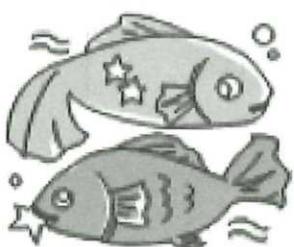
優夏

凌矢

幸愛

源

龍音



第十一回（令和元年度）佳作



くものすを ちくちくちくと あんでいる
いもうとが ぼくのおうちに やつてきた
なのはなが くすんとゆれる うれしそう
夜の星 いつもわたしを 見て いるよ

石部南小学校 一年

三雲小学校 一年

岩根小学校 一年

石部小学校 三年

三雲小学校 三年

岡崎
おかざき

吉川
よしかわ

藤野
ふじの

望月
もちづき

中武
なかたけ

春乃
はるの

绚乃
あやの

早苗
さなえ

勇希
ゆうき

ひまり





第十三回（令和二年度）佳作

うみのほう ぐんぐんすすめ くじらぐも

下田小学校 一年

「ぐるり」と ぐりがごはんで かくれんぼ

三雲小学校 二年

くりひろい 一にもひろえた きみにあげる

三雲東小学校 二年

さつまいも くきでつなひき がんばるぞ

三雲東小学校 二年

電気はね ぼぐがないと ひまなんだ

水戸小学校 三年

中野 ながの
陽翔 はると

坂巻 さかまき
琉花 るか

七藏司 ななぞうし
奏かなで

仙原 せんばら
優斗 ゆうと

大塚 おおつか
誠真 せいま



第十四回（令和二年度）佳作



はみがきで	シャキシャキワチュペツ	音あそび	石部南小学校	三年
あきの日だ	おちばがあそぶ	あかみどり	三雲小学校	三年
落ち葉たち	家族みたいに	集まるね	三雲東小学校	三年
とけいはね	よなかになると	さみしいんだ	岩根小学校	一年
ピアノがね	ひいてひいてと	よんではいる	菩提寺小学校	二年
あかとんぼ	かぜでとおくに	いつちやうか	石部小学校	一年
出口	まつうら	前田	小川	栗林
悠音	ひな	まえだ	おがわ	くりばやし
	はると	しづく	彩芽	爽介
			あやめ	そうすけ
			れん	れんと





第十五回（令和四年度）佳作

うんどうかい みぎ手にかいた メッセージ

菩提寺小学校 一年

雪だるま フロフロいろぶ いたそうだ

石部南小学校 三年

まつぼっくり りすがたべると えびフライ

三雲東小学校 三年

スズむしが よるのがつきで おおはしゃぎ

石部小学校 三年

つまさきで そつとちかづく かえるとり

菩提寺小学校 二年

ねこじやらし ああこいそばいよ ねこが来る

水戸小学校 二年

岡本

繖奈

奥村

笑琉

鈴木

千聖

鈴木

悠斗

白井

絵子

阿部

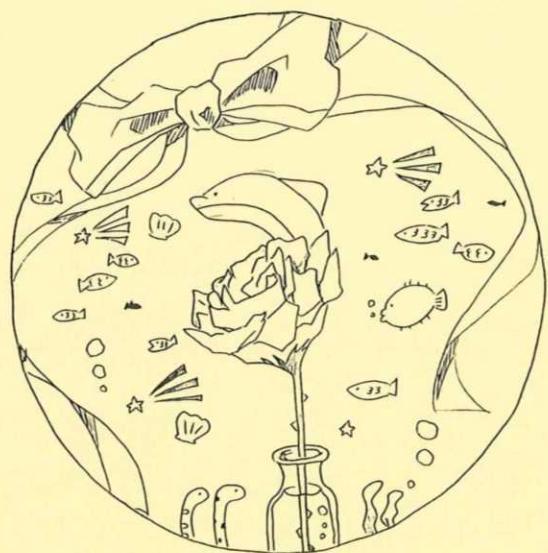
晴斗



【定型詩
部門】

小学校四年生～六年生の部

○掲載作品の作者の学年は、入選当時のものです。





最優秀賞・優秀賞

第十一回（平成三十年度）

最優秀賞
優秀賞

第十二回（令和元年度）

最優秀賞
優秀賞

第十三回（令和二年度）

最優秀賞
優秀賞

第十四回（令和三年度）

最優秀賞
優秀賞

第十一回（平成三十年度）



佳作

第十一回（平成三十年度）

第十二回（令和元年度）

第十三回（令和二年度）

第十四回（令和三年度）

第十五回（令和四年度）

第十一回（平成三十年度）

第十二回（令和元年度）

第十三回（令和二年度）

第十四回（令和三年度）

第十五回（令和四年度）

第十一回（平成三十年度）最優秀賞



菩提寺小学校 六年 内田 ひより



【評】

学校の帰り道でしょうか。ちよつとは急いでいるのですが、落ち葉や木の実があるのを見つけ拾い集めようとしています。でも友達はそれに関心があるのかないのか、立ち止まろうともせず進んで行きます。離れないように急いで拾っています。そうした作者ひよりさんの想いと友達の動き、その関係性が鮮やかに表現されています。

第十一回（平成三十年度）優秀賞



石部南小学校 四年 鎌倉 タリタ 聖美



ヘチマがね わたしをよんぐ せいくらべ

石部南小学校 六年 野島 彩心

マラソンで がんばる背中 風がおす
たつた一つの 自然の応援



第十一回（令和元年度）最優秀賞



菩提寺小学校 四年 伊地知 暖
いぢち はると

帰り道 もみじでうまる かげぼうし



【評】

下校の際の通路でしようか、帰り道と
いう余裕が窺えます。そこは紅葉でいつ
ぱいの、ちょっとしたおとぎの世界のよ
うです。そこに自分の影法師が楽しげに
写り込んでいます。その影法師が、なん
とその紅葉の絨毯に埋まってゆくように
さえ見えます。紅葉の葉と影法師の一
体感心しました。

第十一回（令和元年度）優秀賞



水戸小学校 四年 村上 由衣
むらかみ ゆい

丸太切り かおり広がり 深こきゅう

三雲東小学校 五年 野村 百花
のむら ももか

帰り道 夕焼け空と かげ一つ



第十三回（令和二年度）最優秀賞



瀬田川が びわ湖のお手紙 とどけます

岩根小学校 五年 藤野 皓大



第十二回（令和二年度）優秀賞



だんだんと しずむ夕日に 手をかざす

菩提寺小学校 四年 藪 優香

石部南小学校 六年 城山 琴愛



ふりむけば みんなの習字 飛鳥の字
今にもとびそう 夢にむかって

【評】

「うみのこ」による学習船「うみのこ」による学習船
習の成果でしよう。琵琶湖の水が
瀬田川をとうとう流れ、近畿の
水がめといわれる貴重な水源であることを実感したのでしょう。この
「お手紙」には、その大切な水
を守るためのメッセージが込めら
れているのです。

第十四回（令和二年度）最優秀賞



菩提寺小学校 四年 坂田 有咲

秋の道 とびらが開く 音がした



【評】

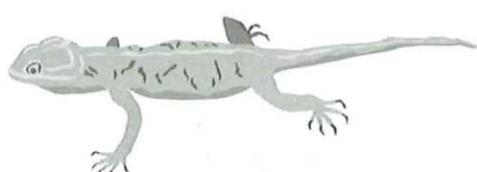
秋の気配の多くは澄んだ外光、あるいは紅葉のイメージそして落ち葉のイメージと重なります。扉が開く・・・とは、かさこそと落ち葉を踏んだ際の感覚でしょうか、新しい心構えが感じ取れます。

第十四回（令和二年度）優秀賞



三雲小学校 五年 森 花楓

カナヘビと 秋の景色を ながめてる



もみじの葉 風にゆられて 一人だち

石部南小学校 四年 山本 真生

第十五回（令和四年度）最優秀賞



菩提寺小学校 六年 園^{その}寿音^{じゅのん}

帰り道 もみじの音が 日がわりで



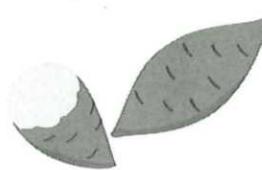
第十五回（令和四年度）優秀賞



菩提寺小学校 四年 笹尾^{ささお}

将誠^{しょうせい}

やきいもの 中みの色は 太陽だ



下田小学校 六年 今枝^{いまえだ}

理帆^{りほ}

本を閉じ 上を見上げて 気がついた
実りの秋が もうすぐそこへ



【評】

ちょっと気分的に余裕のある学校から
の帰り道でしょう。このもみじは足元の
落ち葉ではなく、山々の紅葉の日々移り
変わる美しさを奏でる「音」と表現しま
した。せわしげな登校のときには気づか
なかつた光景かと思われます。



第十一回（平成三十年度）佳作

いちょうの葉 風とのたいけつ まけちゃつた

せみに告ぐ 最後の力 ふりしほれ

もみじの木 はっぱをみると 手みたい

風がふくと 拍手している

親友だ 汗にじむ時 黄ぼうし

これからもずっと 思いでぼうし

持久走 動け右足 あと一步



菩提寺小学校

四年

木下
きのした

陽菜
ひな

菩提寺北小学校

五年

森
もり

俊輔
しゅんすけ

石部南小学校

六年

永井
ながい

翔
しょう

菩提寺北小学校

六年

柴田
しばた

煌空
こうくう

三雲小学校

六年

辻野
つじの

早香
はやか



第十一回（令和元年度）佳作

滝の汗 ジャンプサーブに とびちつて

すすきはね 風がふくたび シャララララ

バレンタイン 氷にうつる 赤い顔

秋の夜 虫のなき声 ひびきあう

小さき者の 夜のえんそう

夏の川 とれたて野菜 洗つてる



菩提寺北小学校

五年

水戸小学校

五年

石部小学校

六年

三雲小学校

六年

梅原 うめはら

瑠美歌 るみか

岩根小学校

六年

青木 あおき

柚依奈 ゆいな

六年

大石 おおいし

一澄 いづみ

石川 いしかわ

舞佳 まいか

六年

佐野 さの

大 ひろし



第十三回（令和二年度）佳作

空をまう いちまいのもみじ 親ばなれ

手をあわせ 聞こえますか おじいちゃん

向かい風 あせがどびちり 円をかく

春の花 ひらひらと空を はしつてく
ゆつくりきえて 終わりへとむかう

ありがとう お弁当箱 米見れば

どっしりしゃけが のしかかつてる



石部小学校 五年

石部南小学校 五年

下田小学校 五年

石部南小学校 六年

石部南小学校 六年

藤原
ふじわら

武田
たけだ

三露
みつゆ

吉村
よしむら

中本
なかもと

康
やすし

悠里
ゆうり

理生
りき

心花
こはる

浩太
こうた

第十四回（令和二年度）佳作



喜びは 雨降る中の うずまきさん
良いことあるかと 歩き出す時

緑の葉 赤にバトンを わたします
つぎからよろしく 赤色もみじ

くり落ちて 木々はこう葉 ぼくはここ
この秋の中に ぼくは生きてる

やきいもを パカツとわって えがおさく

薄もみじ なんと優しい 秋の色

秋の山 ちくちくささる くつのうら

秋の山 いろとりどりの パレットだ

ぼくはとり 大きなふくで 身を守る

下田小学校

六年

服部

ろな

水戸小学校

六年

藤橋

彩香

石部小学校

五年

泉

祐成

岩根小学校

五年

千祥

瑛斗

菩提寺小学校

五年

林

安田

菩提寺北小学校

五年

田中

愛杏

三雲東小学校

四年

やすだ

葵咲



第十五回（令和四年度）佳作

見るたびに ちがうふくくる 秋の山
ひがんばな みどりのなかの あかいルビー
ひっこしで 泣き別れの日 星ひとつ
夏祭り わたあめ片手に 夜の花
テストの日 えん筆あせだく 目指せ百点

三雲小学校

四年

古本

真由佳

ひがんばな みどりのなかの あかいルビー

菩提寺小学校

六年

濱田

ふるもと

ひっこしで 泣き別れの日 星ひとつ

菩提寺小学校

四年

植木

ふうか

夏祭り わたあめ片手に 夜の花

下田小学校

五年

三露

え

テストの日 えん筆あせだく 目指せ百点

菩提寺北小学校

五年

村津

かいち

下田小学校

五年

惠奈

な

菩提寺北小学校

五年

綾香

あやか

菩提寺北小学校

四年

楓雅

ふうが

菩提寺北小学校

四年

佳

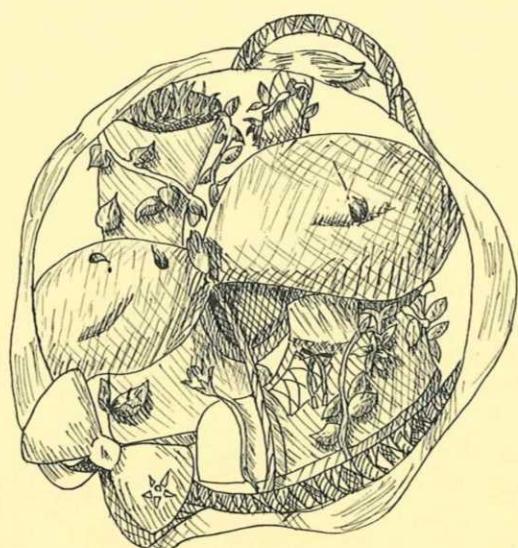
まゆか



【定型詩
部門】

中学生の部

○作品集への掲載作者については、当該入選当時のものです。





最優秀賞・優秀賞

第十一回（平成三十年度）

第十四回（令和三年度）

最優秀賞

優秀賞

第十二回（令和元年度）

第十五回（令和四年度）

最優秀賞

最優秀賞
優秀賞

第十三回（令和二年度）

最優秀賞
優秀賞

最優秀賞
優秀賞



佳作

第十一回（平成三十年度）

第十二回（令和元年度）

第十三回（令和二年度）

第十四回（令和三年度）

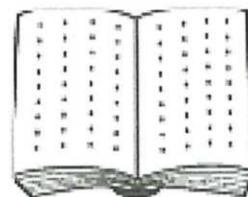
第十五回（令和四年度）

第十一回（平成三十年度）最優秀賞



日枝中学校 二年 砂田 妃菜

校庭で遊ぶ男子のあの声も
きこえぬ窓辺の本読む少女



第十一回（平成三十年度）優秀賞



石部中学校 一年 森地 董

笑顔ならきれいに見せる顔よりも
くしゃっと笑う顔が見たいな



日枝中学校 三年 小林 美月

プリントの冷気をまとつたふるえる字



【評】

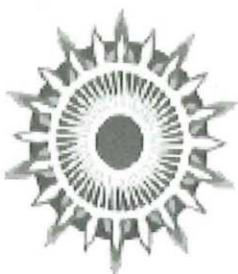
活発な校庭の男子たちに時々は気を向けていつも、読書にいそしむ作者妃菜さん。世界と自分の世界との境目となる窓辺の静謐な空気感が心地よく伝わります。青い春の入り口にある繊細な心模様をちょっぴり示しながら、動じることのない内面が描かれています。私はわたしといった中学生らしい人格形成の一端がうかがえます。

第十一回（令和元年度）最優秀賞



石部中学校 三年 草場 光星
くさば こうせい

夕日から 照らされのびる 黒い影
地面上にうつる 大人の僕よ



第十一回（令和元年度）優秀賞



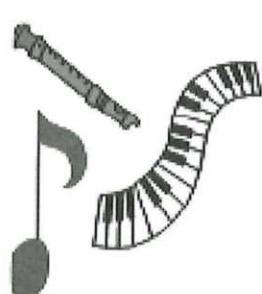
日枝中学校 一年 萩原 菜々子
はぎわら ななこ

じっと見る 線香花火 落ちる今



日枝中学校 一年 奥村 涼葉
おくむら すずは

このおとを もつとゆうびに だせたなら
きいてほしいと あなたにいおう



【評】

秋の夕暮れの陽射しでしょうか。くつきりと・・・というより、我を強調するような長く自信ありげな長い影。広い地面とは、校庭の広がりと想像します。そこには自らの意思とは別に、大人になつた自分がすでに存在しているようです。
中三らしい男子の躍动感があります。

第十三回（令和二年度）最優秀賞



【評】

窓開けて 太陽光る 朝七時

洗濯係の 父うれしそう



お父さんが洗濯係……とはいいですね。まして、うれしそう……とは微笑ましくも思われます。まさにさんさんと輝く太陽のような明るい家庭であり、家族全員協力し合う暮らしのようすがうかがえ、応援したくなります。



第十三回（令和二年度）優秀賞



石部中学校 二年

栽松

高拓

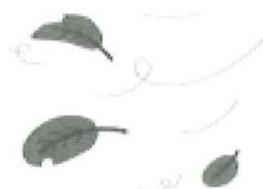
日枝中学校 三年

村田

琴音

脳内で 自分と自分が とつぐみ合う
どっちの理由も うなずけるんだ

秋風が わたしの肌に 相撲取る



第十四回（令和二年度）最優秀賞



【評】

甲西北中学校 二年 平澤 仁志

扇風機 休むひまなく 風おこす
ぼくにすずしく それにきびしく



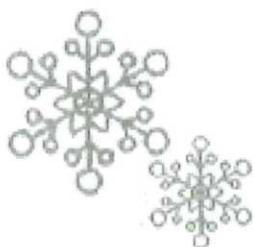
勉強中あるいは運動後なのでしょう
か、せわしく回り絶え間なく涼をおこし
てくれている扇風機。その風は、ファイ
ト・ファイトと「ぼく」を励ます以上に、
厳しさと戒めさえうかがえます。

第十四回（令和二年度）優秀賞



甲西中学校 三年 加藤 朱音

雪の日に 足あと上書き 父を追う



石部中学校 一年 市村 いちむら
峰大 みねひろ

雨つづく セミのぬけがら 手の中に



第十五回（令和四年度）最優秀賞



石部中学校 二年 今西 紗音
いまにし あやね

落ちた栗 太陽見上げて ため息を
いつ拾われるかと 待ちくたびれて



第十五回（令和四年度）優秀賞



甲西北中学校 三年 宮脇 大輔
みやわき だいすけ

カブトムシ 育てる側も 育つ側



日枝中学校 二年 西尾 あかね
にしお あかね

「わりきれた」 格闘の後の 方程式
ひとり思わず 笑みを浮かべる



【評】

お陽さまが差し込んでいるとはいえ、
イガ栗がてんてんとやや肌寒い秋風にさ
らされています。人気のない栗の樹々の
もと、イガ栗のため息が漏れてくるよう
です。ひととの関わりを受け入れる栗の気
持ちを、比喩表現しているところがこの
歌の魅力です。



第十一回（平成三十年度）佳作

青空に 寝転ぶ私 浮かぶ雲

同じ速さで 進む時間

思い出と 床の汚れを 残し去る

姉の部屋へと 差し込む西日

雪を見る 猫の姿を 見てる僕

夏休み 過ぎる速さは スポーツカー

菜の花と 髪がゆらゆら 鼻をする

甲西中学校

一年

石部中学校

二年

日枝中学校

三年

石部中学校

三年

大継
おおつぐ

真由
まゆ

小川
おがわ

絵梨
えり

石部中学校

三年

奥村
おくむら

佳乃
かの

永井
ながい

達也
たつや

田中
たなか

智希
ともき

第十二回（令和元年度）佳作



月に一度 僕を迎える テスト達
「かかつてこいや」 勝負してやる

晴々と 真っ青な空 見上げれば
私の心も 雲一つない

流星群 空いっぱいの 宝石箱

名月や 一人歩きの 道照らす

暑き地を 縦横無尽に 駆け抜ける



石部中学校 三年

石部中学校 三年

三年

鈴木 すずき

川上 かわかみ

三年

甲西中学校 三年

三年

遠藤 えんどう

三年

甲西北中学校 三年

三年

北村 きたむら

三年

北島 きたじま

三年

珠果 じゅか

三年

一綺 いつき

三年

彩花 あやか

三年

優花 ゆうか



第十二回（令和二年度）佳作

交差点 差し出すてを見て 頬をそめる

どんどん先ゆく 小さなせなか

田んぼ道 街灯のない 暗闇で

その闇とかす 蛍発見

やつと会えた マスクの奥に 友の顔

秋の風 カラカラなるよ 足元で

来年は 打ち上げ花火 見ようねと

今年は一人で 線香花火

石部中学校 二年

一年

北村

優典

甲西北中学校 二年

三年

常賀

咲希

甲西北中学校 三年

四年

米津

椎菜

甲西北中学校 三年

四年

鶴村

彩葉

甲西北中学校 三年

四年

林

莉子





第十四回（令和二年度）佳作

寝る前に も一度覗く 金魚鉢

ひまわりの 向こうへ走る 君を追う

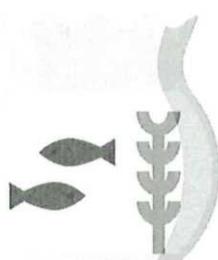
誕生日 友の成長 春麗

高い崖 急な坂道 深い谷

今日も私は 私と向き合う

灼熱の 夏を涼しく 過ごそうと

どんどん進む 環境破壊



石部中学校

三年

甲西中学校

三年

日枝中学校

三年

甲西中学校

二年

日枝中学校

二年

黒木

青空

清水

来夢

吉澤

柚姫

渡邊

優美子

山田

宇多



第十五回（令和四年度）佳作

声援が 風になつてゐる 運動会

道歩き すぎゆく季節に 手を伸ばす
すずしい風を つかまえるように

同じ日は ひとつもないけど いつの日も
変わることない 帰り道かな

帰路につき 今か今かと 電車待つ
風漏れるホームに しもやけの手

この音を しかくからまるに できるかな

美しい音 韶かせたい

甲西中学校

一年

米津

蒼唯

石部中学校

二年

内林

天

甲西中学校

二年

小谷

玲音

甲西中学校

三年

福井

結心

甲西中学校

二年

野村

百花

いのちのよろこびを うたう

美しい詩のかずかず

～あとがきにかえて～

詩人 野呂

さかん

詩とは何か

人間はものを感じることのできる動物です。美しい景色を見ると、心がうつくしく、かがやくような気持ちになります。よいおこないと見ると、心がそれらのおこないにそめられて、あたたかくやさしい気持ちになります。ふしぎなものを見てびっくりすることも、悲しいことにあって心がしずんでしまうことも、『のを感じること』から起こってくるのです。詩は、このよだな心のよろこびやおどろきや、かなしみを、もっとも短いことばで書きあらわしたことです。

美しいことばは、人の心をうつくしくするはたらきがあります。正しいことばは、人の心をうつくしくするはたらきがあります。正しいことばは、人の心を正しく明るくします。はんたいに、きたないことば、らんぼうなことばは、人の心をきたなく、らんぼうにします。詩を書くことの大切さは、このためにあるのです。

詩を書くよろじび

わたしたちは詩を書くことによって、なにを得ることができるのでしょうか。

(一) じぶんの心のなかを、ふかく見つめることができるようにになります。

詩は、まわりの風景やできごとを、よく見るとじぶんから生まれてきます。それといつしょに、じぶんの心のなかや人の心のなかも見えてきます。

(二) 美しいもの、よいものへの関心が深まります。

道ばたに咲く、小さな一りんの花の美しさにも、心がうごかされるようになります。また、目に見えるい他人のよいおこないにも、気がつくようになります。

(三) 新しいじぶんを発見できます。

人や動物や植物などの生きざまに心打たれることは、じぶんもそのように生きたいと、願うことであります。詩を書くことで、じぶんがどのようにになりたいか、なにをしたいか、じぶんについて、新しい発見ができます。

このたび、湖南省の小・中学生が書いた詩や短詩形(俳句・川柳・短歌)が、このように美しい本になります。どの作品も、その人でなければ発見できなかつた感動が、うつくしい言葉で表現されています。

「湖南省の小さな詩人たち」に参加した小・中学生のみなさんとともに、喜びたいと思います。

「湖南市の小さな詩人たち」事業について



OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA) で、日本の 15 歳の子どもたちは、正確に読み、書かれたことを根拠に理解したり推論したりする「解釈」と、書かれたことを根拠に自分の意見を述べる「熟考・評価」に課題があることが指摘されました。こうした言語力の低下や語彙の不足は言葉で相手に自分の思いを伝える力の欠如をもたらし、短絡的に暴力行為に走ってしまう傾向にあるとも言われています。

湖南市においても同様の傾向が見られることから、自分の思いを詩・俳句・川柳・短歌に託すことを通じて、言語力や表現力を育成していきたいと考えました。こうした力の育成はふだんの授業の中でも取り組んでおりますが、創作された優秀な作品を市全体で表彰することにより、ことばに対する子どもたちの意識が高まり、きちんとと思いを伝える力が育まれると考えます。そして、これらの営みが湖南市青少年の健全育成に寄与していくことを願っています。

第十一回～第十五回（平成三十年度～令和四年度）

湖南省の小さな詩人たち

（子どもたちが創った

詩・俳句・川柳・短歌

入選作品集）

石ころ

発行日 令和五年十一月
編集・発行 湖南省教育委員会
印 刷 株式会社 きじまや